

介護追いつめられた末に

自営業、休業制度なく

昨年11月、京都市の自営業の男性が、介護中の認知症の母親の頬を平手打ちした。母親は翌日に死亡。後に病死とわかったが、男性は警察に逮捕され、母親の骨も拾えなかった。ふたたび生きてきて約35年。自営業者に介護休業制度などはなく、男性は10年前から母親の介護の一切をひたすら受け止め、追いつめられていた。

認知症の母たたき、逮捕された男性

林敬さん(52)と母正子さん(当時86)は、京都市上京区の築100年超の一軒家で暮らしていた。

昨年11月15日午前3時ごろ、2階で寝ていた林さんは、母の1階寢室のドアが開く音を耳にして起きた。「おなか痛い」と言われ、トイレに連れて行っ

た。母は10日ほど前から頻繁にトイレに行こうとして転倒したり、トイレで立ち上がれなくなったりして、林さんは介助の合間にわずかに仮眠する状態が続いていた。

母はなかなかトイレから出てこない。中をぞくと、トイレットペーパーが便器からあふれていた。部屋に戻して寝かせたが、約10分後、再び階下で大きな物音がした。母がタンスの脇に横んでいた小物入れの缶を服

を散らかしながら「紙、紙」と叫んでいた。トイレにいて紙がないと屈したらしい。

それから布団に寝かすつては起き上がるを繰り返すうちに、抑えていた感情がはじけた。「寝ときー」。母の右頬を2回平手打ちした。10年母を介護して手をあげたのは初めてだった。母のパニックは鎮まり、眠りについた。

翌朝の母は元気がなかった。認知症に加え、5年ほど前から心臓病を患っていた。食欲は旺盛だったが、この日はパンにも手をつけず、顔のむくみもひどかった。

昼過ぎに移動を嫌がる母を布団ごとタクシーに乗せ、京都第二赤十字病院の救命救急センターに運んだ。医者のみたては「心臓が限界にきている。手のほどこしよがな」。翌朝10時の診察予約を入れて帰された。

家に戻った母はすぐに横になった。「ごはらいらんか？」と聞いた手が振って断った。スポーツドリンクを口に含ませて

寝かせた。それが母に触れた最後の瞬間となった。

その夜は母に起こされず、林さんは泥のように眠った。翌日に目覚めたのは、診察時間も過ぎた午後一時過ぎ。寢室に行くくと母の息がなかった。

京都府警の警察官から、前日に母をたたいたことを繰り返して聴かれ、夜に暴行容疑で逮捕された。

仕事量減り蓄え底つく

物心ついたとき父はいなかった。同居の祖父母とも死別し、成人前には母との2人暮らしとなった。

西陣織の図案を描きながら様々な美術費に応募して腕を磨き、25歳のころから寺の壁画や天井画、仏像の彩色を手がけるようになった。舞台美術の依頼も受け、30代で京都市内のビルフロアを借りてアトリエを構えた。母はパートをやめ、息子仕事の成功を祝いよくカフェでケーキを食べた。仲のいい母子だった。

母の様子が変わったのは10年ほど前。ハンドバッグから意味なく物を出し入れる姿が見られるようになった。留守中に騒ぎ、近所の人の知らせでしばしば職場から戻った。徘徊も始まった。

4年前からシャンパーを油代

自営業者の介護、50万人

公的支援求める声

若いゆゑ親を支える子の仕事と介護の両立をどう図るか。超高齢化社会を迎えて、政府も対策を打ってきた。

1999年度には企業に介護休業制度を義務づけた。現在、労働者は98日の休業を認められ、休業中は雇用保険から賃金の4割を給付される。2010年からは年5日の介護休暇も認められるようになった。だが、厚生労働省職業家庭両立課によると、支援対象の多くは会社員ら勤め人

で、林さんら自営業者に配慮した制度はない。総務省の最新の就業構造基本調査によると、2012年に親らを介護しながら働いている人は約290万人。このうち自営業者は約50万人を占める。

立命館大の津止正敏教授(地域福祉論)は「任意に労働時間を短縮できる自営業者は、無理すればなんとか仕事と介護を両立できるケースが多い。しかし結果として収入は減り、自宅介護が可能という理由で特別養護老人ホームなどへの入居順位も低くなりがち。何らかの公的サポートの仕組みが必要だ」と指摘する。

(後藤春良)



母が眠る露に手を合わせる林敬さん(京都市上京区)